

愚直の果て（後編）

西村 壽 郎

バスで家に帰り着くと祖母がカンカン照りの太陽の下庭で糸を引っ張って機の糸を箴すずに通す作業をやっていた。

子供のときから今迄にこんなこと見たことなかったのに、と思ったが「只今帰って来たよ」というのに「お、そうか」と言つて又仕事に戻った。「祖父はジイだね」と言つたが「新屋に寝とる」と言う。

我が家と言っても母屋は大きな麦稈カウ葺きであり、おまけに納屋と言はれる作業場も麦稈葺きであった。

祖父が大工としての腕のみせ処がなかったのは何と

言つても父の怪我による身障者になつてしまつた為であつたと言はねばならない。只一つ小さな離れ座敷の瓦葺屋根を建てただけであつた父は戦傷者ではなかつた。

この離れの新屋に寝とると言う祖父の処に行つた。

「爺やん帰つて来たよ」と言つたが目を見開いて口を動かしているだけで何を言っているかわからなかつた。

これは大変なことだ敗戦のどさくさで充分に医者にもかかれずに死んでしまうのかと思つた。

「婆やん弟はまだ帰つて来んのか」というとまだ夏休みが終つたらんので毎日学校に行つとる。

これはおかしな話であるが戦争中はどの学校も夏冬休みなしでやつて来てそれが続いているのかと思つた。

「それでは学校を見に行つて来る」と言つて私は自転車に乗つて出かけた。

前には宮川が流れ後は山が迫っている内城田国民学校であつた。運動場の上には神宮山蓮華寺という鎌倉時代からのものと言はれる本堂や山門観音堂五輪塔がある、内城田村は山村であり何処にも爆弾は落ちなかつたから無事であるのだろうか。

十分程で学校についた。学校の前の運動場に来て吃驚した。

運動会をやつて来た広場が緑一面の甘藷畑ではないか私は一瞬目を疑つた。それに隣の谷間には変つたトタン小屋が立つていた。

「おーう兄さんではないか」という声がして向かうを眺めると弟が立つていた。二人が甘藷畑を横切つて手を握り会つた。

「これはどうしたんだ。この固い運動場をどうやつて起こしたんね」と私が言う。「みんな俺達でやつたんだ」と言つた。

弟は国民学校最高学年で先頭に立つて長年踏み固めてカチカチになつた運動場の土を大人でも重たい位の鶴嘴を振つて畑にしたんだと言う。

「あの谷の下にある建物は何だ」と言うと、

「あれさ松根油の工場さ」と言う。

ああそうか高等商船の分校に行く前頃には四日市の海燃にも松根油を集めて来て精製する準備をしていたらしかつた、と思つた。

「それでみんな松の根を掘つて持つて来たんか」

「ああうちも親父が一生懸命掘つて持つて来た。何しろ一戸当り何貫ときめられていたんで仕方ないことさ」

「そうか足の悪いのに親父も大変だったなあ祖父はも

うあかんし」

「我々が子供のとき掘つて来て夜うなぎ捕りに行くのに焚いた松の芯のことか」

「そうだ、只あまり松を伐つてから新しい株は駄目になるべく古い株がよいらしくてみんな奥山に行つて探して来たのがよいらしい」

「普通出来たものはドロドロした醤油のようなものらしいが、ここのは透明な石油のようなものが出来たらしい」

「よほどみんな一生懸命で奥山に入つて探したんだろうなあ」

「もうこれからうなぎ捕りに行くのに芯を探してもないぞ」弟の方はこのことがくやしいといった言い方であつた。

二人は自転車を押しながら家に歸つた。

家に歸ると母が四人兄弟の末弟の六郎を背負つて歸つて来た。

隣の集落の実家に行つていたらしい。父の命令でこの終戦のドサクサにいろいろの政府の統制のゆるんでいるときに納屋を建ててしまおうと言うのであつた。

それで実家の兄（我々の伯父）に相談して来いと言う

ことで行って来たんだと言う。

間もなく五郎も遊びから帰って来た。来年から国民学校に行くんだと言う。国民学校高等科二年生で今一緒に学校から帰って来た次郎との間には三郎と四郎の二人の弟があつたが一人は病気で、もう一人は事故で死んでしまったのであつた。

少しやつれた様子の母を見て何かあつたのではないかと思つた。

祖母の方は箴通しがすんだのかも庭は片つけてあつた。

父は夕方迄帰って来なかつたがそれ迄鰻釣りに行つていたらしい。その頃は田んぼにも川にも鰻はいくらでも居つた、まるで預けてあるかのような穴があつてもらつて来るんだ、とよく冗談を言つていた。

十匹程よく肥えた鰻を見せた。今夜はこれで歓迎会をやるう、と言つた。

下戸の親父が今迄酒を飲んで酔つ払つたのを見たことはなかつた。どうしても飲まなければならないときは杯一ぱいで眞赤な顔になった。

早速父は鰻を開いて料理して私の歓迎会をやってくれた。

「祖父の病気はどうなんやろうか」と私が言つたが、父は言つた、「中風が治つたためしがないんやで、たぶんあかんやろう、可愛そうなことやし、困つたことや」と言つた。

これは長年の念願であつた納屋の建設ということに大工である祖父の力を頼めないくやしきであつた。私が半年の高等商船生活の間寝たり起きたりの生活であつたらしい。

祖母が「爺はうなぎが大好きだから持つて行つたがちよつとなめただけや、お粥を少しは食つたんやけど」と言つた。

「やつぱり鮎の方がよいんかのう、鰻は油っこいのがつかえるんやろう」と父は言つた。

すぐに私は祖父の寝ている離れに行つた。

「爺やん大丈夫か」と言うとうつすらと眼を開けて何か言いたいことがあるのか口を開けてモグモグさせているが何かさつぱりわからない。そのうち自由のきく右手を出して鉛筆を持つて書くまねをしている。

私は早速紙と鉛筆を持つて来て祖父に見せて鉛筆を握らせた。

「ヒサヲようかえつてきたみんなおまえがたよりやお

れはもうあかん、たのむ」と書いてだけで後はもう力もなく手もだらんとしているだけである。そこへ祖母がお茶をくんで持つて来た。

「爺お茶飲まんせ」と祖母が言つて茶碗を差し出したがもう眠っている。

祖母は茶碗を卓袱台に置くと次の間に立つて行つて、こちらに向かつて来いという手招きをしている。私はそつと立つて行つて障子を閉めた。

「お前が帰つて来てくれていいあんばいや」と祖母が小声で言つた。

「あのなあ、おつ母がなあ、婦人会の竹槍の稽古に行つて流産したんや」と言つた。

私はあつと驚いた。私は母の十七歳の時の長男であるから母は今何歳だろうか、四十歳にはまだ大分間があるだろう。それは不思議なことではないのであるが、それはまた一途に本土決戦とか何とか言つて明智光秀を倒したのは百姓の竹槍であつたんだ、とかなんとか在郷軍人の軍曹の訓示を聞いてはり切つてやつたらしい、と祖母が言つた。

「それでも今はもう大丈夫なんか」と私が聞くと、「大分前だったかバスで山田の産婦人科の医者に行つたん

や」と言う。

こんなこと直接本人に聞くことも出来ないし、まあ、やそのうちにわかつてくるだろう。

麦稈の母屋の片隅には牛が同居していた。この牛を利用して足の悪い父は馬車ならぬ牛車を造つて来てアメリカ兵が志摩半島に上陸して来たならば、これに日用生活品を積んで逃げるんだと言つたのだ、ということ牛用の小さい四ツ輪車に手木という長い手をつけた車が置いてあつた。

それに牛の背に乗せて使う牛用の鞍も置いてあつた。然しこれはこれからの納屋を建てる用材や瓦などを運んで来るのに役に立つた。

九月になると自家用の里山の中にある用材を父は倒した、大工さんを頼んで来て木取りというのをやつてもらつた。

枝を払つたり皮を剥いだりの仕事が毎日つまつていた。

何しろ秋の稲の取入れ迄に片つけて置かねばならなかつた。

そのうち十日過ぎに学校から通知が来た。

「高等商船学校岡山分校ノ生徒ヲ免ズ」というもので

あつた。

これで俺も天下の風来坊か。と思ったがそんなことを考えて次の学校の手を打って考えるひまもなかった。

毎日がこの建築の用意であつた。

牛の靴というのを稲藁で編んで作ってこれを履かせ鞍をつけ、手木を固定して牛車を牽かせて十料程上流の瓦屋に瓦を積みに行った。この瓦屋は何年も前から予約して料金を支払ってあつたのでいつも快く積んでくれた。

それでも十回程牛一頭の力で全部運ぶ事が出来た。普通の大八車ではもう一人の頼人で坂を登らなければならぬ量を遅い牛歩ではあるが、根気よく休まずに歩くものだなあと考えた。

秋の彼岸の前に祖父は亡くなった。

まだ戦地の前線で生死のわからない兵隊のあるときであり、葬式の手順のこみ合っているときであつたが、寺の和尚さんの特別の計らいで無事すませることが出来た。

「いつも怒っているような顔を見せて自分の氣にいらぬことがあると烈火の如く怒る」

決して他の人には言えない怒るときの形相と、その言動の父の性格を包容して、我々を護ってくれた祖父は亡

くなった。この様に表現しなくてはならない我が家の現状であると思った。

「百姓なんか駄目だ、どんなに努力したって只食って生きて行くだけだ、俺は足が悪くて満足に百姓仕事が出来ないのだからお前達遊び事を止めてしつかりと家の手伝いをするんだ」これは父の若いときからの口癖であつた。

然しこの戦時中、足の悪い自分を助けてくれる牛車を作つたということは大変な発想であると思った。

祖父の死を悲しんではかりられない。弟の次郎は来年農学校を受験するんだと言つて勉強を始めた。

彼岸がすんだ頃角屋君と永井君が揃つてやつて来た。離れ座敷に上げて今迄の三人交互に終戦後のことを話すときりがなかった。

角屋君は舞鶴の海兵での話、これは教官が伏竜特攻隊の隊長として行つたとか、永井君は今迄行つていた獣医学校を止めて秋田の鉾山専門学校受けるんだと言つた。

角屋君は当然海軍省からの免生徒の辞令をもらつて来たんだろうが、そんなことに何もこだわっていることなく来年は三重高農の土木科を受けるんだ、と言つてお前

も百姓やるんなら農業科を受けたらどうか、と言った。

私は角屋君の農業土木の方は将来性があるだろうが永井君の方はわざわざ獣医学校を止めて鉱山学校に行くのはどうか、と言うと親父が獣医学校を止めよと言うんだと言う。

彼の父は獣医であつた。長年軍隊の獣医を務めて来て定年で除隊して来て畜産組合の獣医をやっているのに何故止めよと言うのだろうか、と思つた。

やはり軍隊の獣医のことが忘れられないらしい。何と言つても軍隊は馬が専門であつて、その隊内の獣医としての地位は軍医に次いで高い。今は軍隊が無くなつたんだから全くこれには望みがない。今やつている開業獣医の立場からするとこの和牛地帯というのは獣医殺しといふんだそう。牛は病氣することがほとんどないんだ、と言う。

そんなら次に行こうと言う秋田の鉱専の方は将来性はあるんか、と問うた。

これは探鉱科に行くんだと言う。探鉱とは字の通り鉱物を探す研究で測量が主である、と言つた。角屋君の方は純粹の軍人からの転向であつて、日本中丸焼けであつて橋や都市計画の測量は無限にあるだろう、と思つた。

然し二人共何人かの兄弟の末子であり、私の立場とは違ふんだと思つた。親の都合で止めとけと言はれればそれ迄であるが、行こうと言つて行けと言はれれば誠に有難い境遇である。

それにもう兄がれつきとした家の後継者として居るんだから問題はない。

話が長くなつて来て昼過ぎになつて来て母が氣を利かして昼食の用意をして持つて来た。

「みなさんよく来てくれました、何もありませんが田舎料理ですが」と言つて御飯と芋煮と野菜の料理を置いて行つた。

するとあれは誰ねと二人が口を揃えて言つた。私は笑いながら「母さ」と言つた。

すると、へえー、と二人が言つた。

何しろ後で聞いた話であるが永井君の母はうちの祖母と同年生れであつた、角屋君の方もそれに近かつた、二人の母のイメージは私の母とはかけ離れたものであつたのだ。

彼岸過ぎて今度は里山で伐つた木を製材所に運んで柱やたる木に製材してもらわなければならなかつた。

里山から五軒位離れた製材所に行つて牛車で運んで来

ると昼過ぎ迄かかった。これは十日程かかった。

大方の用材が出来上つても大工に加工してもらう迄に古の納屋で稲の取入れをしなければならなかった。

今迄「百姓は駄目だ月給取りになれ」と言う親父の言葉を信じて百姓仕事の方は手伝い気分で子供のときからやつて来た報いが来た。

稲刈りも手馴れていないと腰が痛い、いや馴れても短艇漕ぎとは違っていると言はなければならぬ。何しろ一日中やらなければならぬ。祖父は亡くなつても代わりがやつて来たから親父の方は安心したのかのん気なのだ。田や畑に歩いて行くのいつも三倍も時間を費やしてやつて来る。それは途中道で会う人に世間話をやってきり目がないんだと母はぐちを言った。これは歩くだけでも普通の人とは三倍も疲労するんだといつも言った。

何と戦争に負けると言うことは何もかも駄目になることかと思つた。弟が牛に馬鍬を引かせて田耨えをやつて植えた田が穂を出して来たが、何処の家の田も何かおかしいのである。

今迄日本の田の肥料は満洲から持つて来た大豆粕と北海道の鯨粕が主体であつたが戦争になつてから四年程は

何も無かつた。

自給肥料と言へば役牛の厩肥と紫雲英だけであつた、それも麦の作付けのため面積は減らされていた。

それで今年によつては、不良天候のために窒素の消化不良による葉の過繁茂による稲熱病^{イモチ}が発生する時があつたと言うけれども今年の稲は違つていた。まさにこれは敗戦病とでも言うべきものであつた、葉に大きな斑点があるのに稲熱病とは違うのであつた。

これは加里不足によるものと県の農業試験場で勤務して来た古老が言つた。

それでこれから収穫する米は今迄になかつた凶作であつたわけで、「百姓なんて馬鹿のすることだ、どれだけ努力したつて食つて生きて行くだけだ」と言つて来た親父がこの土地の平均耕作地を上回る五反あつた田ん圃の一反の山間の田を売つてしまつた。

それで時代の逆流に会つてしまつてどうしようもなかつた。

食つて生きるだけの米はとれなかつた。今年とれた米が一年間食うだけあるかないかは来年の秋にならなければわからないことだ。

とに角稻の収穫がすんで桑園を掘り取つた跡に植えた

甘藷を掘って麦播きをやらねばならない。

この麦播きの用意はまた大変なことであった、甘藷の跡はすぐに出来るが田ん圃の跡は大変な人力が要求された。これは何と言っても親父の口車に乗って百姓からの脱出を試みた懲罰であると思はなければならなかった。登竜門を飛び越え損なうて落ちて来た鯉である、じたばたせずまな板の上に乗るより外ないんだ。

それでもこれ迄の牛車により敗戦の下サクサをくぐり抜けた親父の策略は最後の詰めに到達して、大工仕事は出来上る処迄来て麦播きをすませると、伯父を頼んで来て古納屋を解体した。中には今迄わからなかった構造のものが出て来た。

子供のときから、見たことのなかった。いつも藁を積んであった下から煉瓦積をしてあって下に火を焚いて作業するらしいものが出て来た。

これは何だろうと言うと、親父が、これは茶を揉んで作る炉だ、と言った。

今はもう共同製茶で機械で揉んで楽になったが、お前が生まれる前頃は死んだ祖父がこの炉で汗水たらして一生懸命揉んだのであると言った。

何しろ茶は暑い時収穫するものだから二番茶など真っ

裸で禪一つでやったんだ、と言う。

これはまた今迄に無関心で来たが将来に亘って大きな課題となつて前途に広がる問題であった。

共同製茶というものの、それに茶という作物の正体を確かめるのに大変な努力をしなければならなかった。

年末迄に地均しをやつて一月中旬に隣近所と親戚の人を全部頼んで地搗きをやつてもらつた。これは実用半分(本当に地固めして上に重量の柱を支えること) お祝いの行事半分のような習慣の行事であった。

それでも戦争のため集落(百二十戸)内の人々にとつては長年こんなことはなかったのでびつくりしたらしい。

二月になつて吉日を選んで地搗きと同じ人を頼んで建前をやつた。二間(四米)梁の長さ五間の納屋が出来上つた。

然しこれは十年も前から計画して来た養蚕の為の設計であつた。それ迄は畑の半分は桑と茶で桑の方が主で茶の方は大方の家で畑のまわりに植えられた周囲園と言はれるものであつた。

それにもう既に桑は全部掘つてしまつて甘藷畑になっているのであつた。

これを戦争がすんで又昔のようにアメリカに買ってもらっていた蚕を飼って、絹を買ってほしいと言っても無理な話だろうと思った。

それにしても此の時大流行の農業講演会であちらでもこちらでも、もう絹の時代は終ったこれからは畜産と果樹の時代だ。それに米を少なくして小麦を作ってパンを食う時代である。と言うのであった。

それでも瓦も葺いて床板迄張って出来上ると親父の高らかな勝利宣言である。

「これからは蚕飼うのに苦勞せずになむぞ、何と言っても上簇のときに煉炭の火が危なくて今迄は麦稈葺屋根の下で夜も寝られず煉炭の火の番をしたもんだ」

これは蚕が桑を食べて極限迄大きくなると桑を食えずに頭を上げてすき透った頭を振って特有の動作をするようになると、これを順繰りに集めて来て上簇と言うのに入れて繭をさせるのであるが、この蚕が一斉に糸を吐き出すとき部屋を温めて空気を乾燥させなければならぬ。それがために煉炭を焚くのである。これは重要な作業であった。これをさぼっていてやらないと解舒カイショが悪くて女工が困ると言うものであった。

解舒と言うのは繭マユから糸をつむぎ出して絹糸にする作

業である。繭は蚕が吐き出した糸で自らの身を護る為に、外敵に食はれないようにする為に作って、外からは自分が見えない誠に見事なものである。この中にすっぽりと体を包むと中で蛹になって、二週間もすると成虫になってこの繭を喰い破って穴を開け外に出てくる。その間に絹糸紡績会社は養蚕農家から繭を買取って、この蚕が繭を食い破らないうちにボイラーの蒸気で蒸してしまつて蛹を殺して乾燥して、特別な冷蔵庫に貯蔵する。

この量が会社の大きさであり一年間会社を動かす女工の人数にも当てはまるわけである。

足の悪い親父もこの蚕飼いとゆうものを一生懸命やって来たのは私も子供のときから見て来た。

何しろ日本が一大農産物の絹を買ってもらっていた御得意様であり、石油を買っている重大な産業の元締めのアメリカに宣戦布告したのであるからよほどの決断であつたんだろうか。

然し惨敗の戦争であつても今後農業が自家食糧以外の、所謂換金作物として何を選べべきか、何が将来一番よいと思われる作物になるのだろうかと言うことであつた。

自分がやったことのない月給取りに憧れて百姓は駄目

だと言って来た親父が、どうしてこの養蚕にだけは未練があったのか、出来上った納屋に棚を作って、大事にしまつてあつた養蚕の上簇のための簇をこの棚に並べて一安心と言う処であつた。この納屋は其後養蚕には一度も使つたことはなかつたのである。

四月には弟の次郎が明野農学校に入学した。この学校は蚕糸学校と言はれて来たが何時の間に農学校に變つてこの年は創立以来の三倍の受験生であつた。

終戦の年昭和二十年の一ケ年はろくに勉強もせずに学校では諸作り、家では田捨えをやつて来た報償の代わりに三年の学習のつもりで入つた農学校が、途中で新制高等学校となつて更に一年間延長となつた。

家では母が八月に七男である弟を生んだ。こんな馬鹿な話があるだろうか、言つたら、日本中の百姓に誰一人「そうだなあ」と言ってくれる者はいないだろう。

この年は田ん圃は豊作であつて大方一人で農作業はやらなければならぬ。

角屋君は去年は納屋の建築の手伝いで無理なのはわかつていたが、来年こそは高農を受けるように今から勉強しろ、と何度も手紙をくれた。

然しこの家庭の状態はどうすることも出来なかつた。

それに弟の次郎の農業教科書を盗読するうちにいろいろのことに興味が出来て来た、これは六十年後の今日流行の家庭農園の流行と同じようなものであつたから同調してくれる人も居るだろう。

然し時代の流れというものは大型船の運航と同じものだと言わなければならない、という思ひであつた。

取り舵一パイ、よう候とやつて見てもすぐには左には廻らない、戦前からやつて来た産めよ殖せよとやつて来たが、敗戦になつて全く時代は変わつてもすぐには変えることは出来なかつた。前の家でも後の家でも同じである、四十歳過ぎた両親から子供を生産して世間並みであつた。只世間並みでないのは私が十七歳の母親から生まれたということであつた。

そんなに言はなかつたつて大したことはないじゃないかと言はれるかも知れない、然しこれはノンフィクションのつもりで書いているのであるから次の一行を読者は注意深く読んでほしいものだ。

角屋君は友達には人それぞれの運命があるんだから仕方のないことだと認識したのかどうか、もう私の進学のこととはふれることなく来年は過ぎたが。

その来年になるとまた一人弟が生まれた。実に見事な

八男である。

鎮西八郎であつた。七郎、八郎共に立派な体格であつた。これは後年いろいろ言はれた団塊の世代のそっくりな代表であつた。

さらにすぐ下の弟次郎は卒業する迄に新制農業高校に制度が変わつて、一年多く勉強の機会が與えられて其上、茨城県の鯉淵農業短大に二年間月謝を送つた。

もうこうなると連続二十年の月謝を用意し覚悟しなければならぬ。弟と交代して農業をやらせるという手もなかつた。それは農業関係の技術員不足によつて三重県の改良普及員に採用されて家に居なくなつたからである。

夜になるとどのようにして後の四人の弟達を大学迄はやれないだろうが新制高校迄は卒業させてやらねばならぬ。そういう時代がせまつていたのである、と考えた。次の五郎が高等学校に上る迄に八年間の猶予をやるというのである、それは麦稈葺の母屋を倒して建て替へることである。幼く死んだ三郎と四郎が育つて居れば違つてくるが、今それをやつて置かなければ築百十年というおんぼろの麦稈葺きである、伊勢神宮は二十年毎に総建替である。あれは茅葺きでも二十年である、麦稈葺きは

五年位で葺替えなければならぬのであつた。それに麦稈の確保が又大変であつた。

稲わらは秋の天気によく乾かすことが出来るが、麦は梅雨の止み間に乾かすのであるから大変であつた。それに稲藁は役に立たない。

特に小麦は晩生であるので梅雨の来る前の天候との競争であつた。これは麦稈葺に一番よい、自分で採つた副産物の麦稈で屋根が葺けるのだから百姓生活を知らぬマスコミにとっては一見大変合理的にやつていると思うことだろう。戦時中B29による日本全国焼失の対策として焼こうとしても焼くことが出来なくなつて残つた山林の材木こそが日本再建の礎であつたわけで、当時は山地主と言う言葉が流行した。それに我々百姓が先祖からやつて来た麦稈葺屋根を廃止して瓦葺屋根に改良しようとする願望に対して、何を間違つた考えを起すのか、麦稈葺屋根こそ理想の住宅ではないか、何故ならば冬は温かく夏は涼しいのを自分自身が知らずに居るのではないか、という論説を或農業雑誌に書いている大学教授が居つた。俺ん処は何と言つたつて伊勢神宮の親類だからという冗談を言う者が居つた。これは麦稈葺屋根に対するコンプレックスの反逆である。

これは冬暖かく夏は涼しいのは間違いないことであるがこの大学教授は我々の麦稈葺きと伊勢神宮のような茅葺とをとり違えているのであった。

茅葺の茅を取得するには何と言っても茅山というのを作る。木を生やさずに山に茅を植えるのである、それでもこれは茅が完全に成長して固くなって、枯れて雨のない冬の間に刈り取って納屋に貯蔵して置くわけであるから、百姓の農作業の農繁期の邪魔をするわけではないが、この茅葺屋根を実現するには瓦葺屋根にするよりも多くの経費がかかる。

今迄の麦稈葺屋根では煙突をつけてかまどの煙を抜くに屋根に穴を開けるわけにはゆかなかった。

よしこれで決断した、何としても麦稈葺きの屋根を倒して瓦葺屋根を建てよう。

然し親父の抵抗が如何なるものか想像がつかなかった。

何しろ今迄牛を家から出して屋敷内の空地に牛舎を建てここに入れようといってもどうしても駄目だという。その理由はどうか。

牛が痩せてしまうと言うのである。これはもうこれ以上書くことは出来ない。

今迄とは違って畑には大方甘藷が作ってあるのだからこれを利用して飼料の主体にして豚を飼うと言うと、「そんなきたないくさいもの飼ってみよ、農家の格が下がってお前の嫁も来なくなるぞ」と言った。

それならば鶏を飼うんだ何と言っても家畜のうちで毎日金の入るのは鶏であるんだからと言って、強引に鶏を飼ってこれは弟の月謝の稼ぎ主となったのである。

それでもこれは繊細な神経の飼育法を身につけなければならぬ。よい成績を上げるまでにはいかなかった。

それ故いつの間にか鶏小屋から豚が出て来たと云って怒った。豚に替えて肉豚十頭が出来上ったのであるのにまだ怒りは治まらなかった。

そのうち社会状況が変わって来た。

集落の近くにある里山というのが五反程あってそこには大方薪炭材の雑木が植えてあったけれども、その中には昔から残し木といって十五年毎に伐採して薪造りをして、伐らずに残して置いて大きくなった杉松が十本程あった。

これに目をつけて今迄来たことのない材木屋がやって来て親父相手に交渉するようになった。

幸いなことにこれこそ先祖からの恩恵であった。

ちよつとそこら辺にはない大木であり長さも大変長かった。何度も来るうちに値段が上がつて来るのには驚いた。こういうことには馴れている親父である、或時親父が言つた。お前達誰に頼まれて買ひに来るんかと言つた。

すると名古屋の造船所だと言う。

まだ日本の製鉄所は復旧してないんで何としても船を作らなければならぬと言ふ社会の要求によつて木造船を作るんだと言ふ。

それであるべく大木で長いもの程値が高いんだと言つた。

こんな大木は里に近い山、里山でなければ奥山にはないんだと言つた。

「そうか鋼鉄船ではなくてもよい木造船を手取り早く造つて役立てたいと言ふことか」と私が言ふと「大將親父さんに進言して下さいよ今日はこれこの通り現金持つて来たんだから」と言つて腹巻を開いて現金を見せた。

一本五万円かどうかと言つた。

これで五十万円の経費が浮かび上つた。それに豚十頭を売つたならば二十五万円はあるだろう。

それでも二人の弟が死んでしまつて連続月謝二十年支

払いの中に空いた八年間に家を建てるんだ、と言へば親父のカンシャク病が再発するだろうと思つてやめた。

そうこうするうちに奥山に只一筆二反歩の山を買ひに来るようになった。これは集落の入会権のあつた処を区民全員で分けて各個で植林した杉松の山であつた。

祖父が植えて手入れしてくれていた五十年生の山であつた、これを三十五万円で買ふという材木屋がやつて来た。(入会権とは集落協同で管理する区割の山)

これでようやく親父の決心もついたらしい。隣にペテランの大工さんが居る、この人に毎日相談に行つていらした。最後に決断した親父の言葉は「われ(お前)があんまり言うから家を建てることにした」というものであつた。

そこでこの前牛車で運んだ瓦屋のことであるが今はもう倒産してないんだと言ふ。

隣の集落に新しい瓦屋が出来たのでまだ試験的な段階で販売する処迄行つてないので特別に安くしとくから買つてくれないかと言ふ。

若しこれを使つて十年以内に雨漏りしたならば取替えます、と言ふ誓約書を取つて豚を売つた跡の小屋に入れた。合計三十五坪の住宅の瓦代が二十一万円であつた。

次にはどの様な設計図で建てるかであった。

弟の次郎が農業改良普及所の生活改善係の方に頼んで改良カマドや間取りの図面を取寄せた。然しそんなものには親父は目もくれなかった、何と言っても屋敷と住宅は方位が第一だと言う。今迄住んで来た住宅の通りにすればよいと言う。これは皆昔からの易占いによって最良の方法になっているのであると言う。

そう言へば母が言った。お前が生れたときお爺ちゃんが昔伊勢の国の国分寺であつた国束山クヅガに小僧に行つていたときに貰つて来た易学の本によつてお前の名をつけようと言つたとき、それは同じ名前が実家の大伯母の末子にあつて、盆や正月に呼ばれて行つたとき年は一歳上だから困ると言つたのに、父がどうしてもこれが一番だと言つて聞かずにつけたんだと言う。

母の実家の祖父は日露戦争で戦傷死して居なかつたが祖母の方が困つただろうと後年私は思うようになった。

只これは子供のときのことだけで、それも縁日のときだけのことであつた。

それが国鉄に就職して大阪に居るのだと言うことは聞いていたが、小学校卒業以来三十年経つたとき私の祖母の葬式のときに再会した。

ふだんはあまり喋らない無口の人が挨拶なしに「同じ名前をつけて困つたぞ」といきなり言つたのには驚いた。

よほど身にしみていたんだろうか。

言い出したならばよほどのことでは曲げないいちずの親父のことである。出来ることならば二階建の家にしたと思つていたがさてどのような親父の反対の理論を聞かねばならないのだろうか。

今から四人の弟が、小学校はとに角として新制中学三年、新制高校三年と続いて、勉強部屋は必要だろうと思うと二階にして三部屋位は必要になつて来るだろうと思つたのである。

とに角やれるだけやつて屋根を瓦にして、外装や建具は建てたばかりの納屋を持つてくるようにしてやろうと思つた。

然し二階建てにして弟達の勉強部屋を作ろうという案には絶対に反対だ、と言う。

しまいには母の実家の伯父迄やつて来て、「山田の街にはみんな二階建てがあつたがあれは隣がこみ合つてゐるからお互いに風を防いでゐるからよいのであつて田舎は皆一軒家のようなもので一反位の敷地に真ん中に建っているんだから危ないもんだ」と言う。

「それならば残っている敷地一パイに坪数を多くして庇を無くして金のかからない様にしよう」と言うのと、先に建てた納屋よりも背の低い母屋になってしまつてこれは四方八方に頭を下げつ放しという家相で駄目だ、と言う。

私は親父の相談に行つてゐる経験豊富な大工さんにこつそり相談した。

「親父の言う結論はこれこれのことなんですが貴方の方にはどの様な相談をしに來ましたか」と聞くと、「それは何でも易学とかの方位だけのことや」と言う。

それではこれから四人の弟達が次々と大きくなつて來るのでどうしても二階建てが欲しいんやと言うと、「二階建てでも大丈夫や、台風に強い設計で行こう」と言つてくれた。

「なあに俺は今迄に山田の街で三階建てもやつて來た」と言う。

「それは何か変わったやり方がありますか」と尋ねると、「出來たら二階の処だけは通し柱にする、これは長い最低十八尺の柱にして四寸角位の太さにして建ててから一番上の間仕切りになる角に全部にヒウチを入れる。これは家全体が揺れた場合にひずみが出て來て壞れないよ

うにするためだ」と言う。

それに「親父さんは足が曲らないために天井の低い室では頭を上げて歩くのが苦になるらしい、それで街場の二階建てでは通し柱は二十一尺というのが当り前になつていて、これだと下も二階も同じ天井の高さになるがこれを三尺切つて十八尺で大丈夫だろう。下の方も普通より五寸位下げてやれば頭を打つことはないだろう」と言う進言であつた。それでよろしく説得して下さいと言つて頼んだ。

三日程たつたとき親父は言つた。

「大工の方も大きな家を建てたいらしい、二階建てに自信があるらしいから任しとけ」

と言うことでとうとう承認することになった。

もう一度里山を探して十八尺の長さの柱用の桧が十本見つかった、すぐに伐つてみると八十年もの年輪があつた。

全く不思議な話である、祖父が何かにつけて手を廻していたんではないかと思つた。

こうして昔からやつて來た親戚や親類の結いと言う長い間途絶えていたのを復活して來てた皆さんの人を頼んで來て大仕事になった。

母は毎日食べてもらう昼と夜の食事に音を上げた。祖母は孫の守に没頭した。

それでもこれは集落中の麦稈屋根の家が五十戸もあったのであるから先頭切ってやっただけのことで其後みんな後に続いて建築ブームを起こしただけのことであつた。

これは昭和二十八年のことであつてみんなに麦稈屋根改築の覚悟をきめさせたと思つた。

其後間もなく伊勢湾台風がやって来ても私の二階建てはビクともしなかったのに多くの麦稈屋根は吹き飛んでしまった。

母の実家の伯父の家も麦稈屋根であつて例外ではなかった。いち早く台風から逃れた木を切つて二階建ての用意をした。何分にも家に近い里山の残し木というものは使いものにならなかつた。

それは残し木というのは密植らしい植林のしてある奥山とは違つていた。周囲に何も障害物がなかつた、それ故すくすく伸びていたからで風当たりも強い、この風速六十米と言はれた台風に当たつて柱になる位の木は真ん中で折れるか半割れになつて裂けて使いものにならなく

なつた。

少し大きい杉の木で板にしようと思つて製材所に行つたら、年輪のまゝに割れ目が出来ていて板にならずにバラバラになつてしまつたと言う考えられない様な話もあつた。

それにしても幸運なことであつたと思つた。二階建てを建てて大工の進言で無事であつたことと、それにもまして何処にもなかつた造船材の大木を十本も売つて資金に出来たことであつた。

これが残してあつたならば皆板くずの様になつて売り物にならなくなつてしまつただろう。と親父は喜んで言つた。

これが若し私が製材所、或いは材木商あたりに丁稚奉公に行つていたならば、或いは高等工業の建築科にでも行つていたならばこんなに父も伯父も真向から反対はしなかつただろうと思つた。

それに昔流に結いの制度は復活してよかつたと言うもののこの前代未聞の台風によつて集落中の古住宅は一斉に再建しなければならぬ状態になつた。

親父が普通の体であつたならば二人が一度に二軒もの結返し申し込みに應ずることも出来たであらうが。

何と言っても無我夢中の結い頼みに来ると「俺の処はうまく行つたぞ残し木の太木は造船所に高く売つてしまつたし、二階建ては倒れずに残っているし、何年もの間たまつていた願いがかなつたぞ」と親父の自慢話を聞かなければならなかつた。

教育勅語には父母に孝に、と最初に出てくる、孝とは父母に仕えること、と書いてある。

論語には「牛馬に到る迄よく養うあり、恭い敬せずんば何を以て分かつたんだ」とあるではないか。

親というのは牛や馬のようにいくら大事にして養護して仕えただけでは駄目なんだ。

その上に恭い尊敬しなければいけないのだ。この親父をどうやって尊敬するのか。

猛反対して置いてそれが最後にやらなければならなくなり、その通りやつてうまくいった、するとこんどは大きく自慢する。

これは何が原因でこんなことになつたのだろうか。

それにしても次に書くのは後日譚である。後日私は地域農政推進委員と言う集落の委員に無立候補当選して地域の圃場整備をやることになつた。何しろ無立候補当選した者は強権を持つ。昔からの区有地というのが私の集

落にはあつたので個人の田畑の外にこの耕地の処分をどうするかの見解を聞くために区民の総会をやつて結論を出さなければならなかつたのである。

これは戦後いち早くマッカーサー指令というものによるもので都会では町内会の集会所の敷地や共同の遊園地を共同の所有にして置くと団結心を興すといけないと言うことで個人の所有にせよと言う指令であつたらしい。

それ故私の集落では役員が幾日もかかつて共同の農地を一戸当たり一畝の土地に分筆登記してしまつた。

これが其後の圃場整備のときの難題となつて來たのである。

先づ私は言つた、日本もいつまでも経済成長時代が続くわけには行かないだろう、今政府の方では七十五%、県の方から十五%で村の方は五%かの圃場整備費は補助金として交付されるのであるからその残りを自己負担すればよいことになつていたのであつて今がやり時であると思うという説明をした。

すると分家して何も農家の資格はないが区有地の権利のある若者が居つて「何と言つても政府の言つて來たことには反対しなければいけないのだ」と言う。

何でもかんでも反対党と揶揄されている党员であるの

かどうかわからないのであるが。

これでは話が進まないのである、圍場整備という特別な事業で、例えば地域十町歩の真中に一畝だけの一人の所有者が、俺の処だけ止めてくれと言って残して置かなければならなかったならばどうにもならないのである。

「民主主義とは反対することと見つけたら」か「武士道とは死ぬことと見つけたら」というのは戦中派の我々の胸に残っている言葉であるが。

親父の反対はまだ何かの筋がある、この何でも反対と言はれて来たのは、アメリカ映画で当時流行した「理由なき反抗」と言うのがあったがそれを見に行く暇もなくて只ジュームスディーンの説を読んだだけであつたが。

何でもかんでも反対というのではない。

理由なき反対というのではなく何か理由はある。

然し自己中心主義をエゴイズムと言うが、そうでないものというのは、自己を捨てて他人の面倒ばかりを見ているような者が最後迄存在するわけはなく、確実に存在するのは自我だけである。否神の如き能力の上に立った自己中心主義でなければならぬ、反対することが民主主義であり、それを古くから体得して来たうちの親父は

どんな人物であるのだろうか。

それともこの反対をつき崩して物事を進めるテクニクを悟ったのも大きな教育法であつたわけであるのだろうか。これを反面教師と表現するのだろうか。

祖母はこの新しい家に住んで煙突のついたカマドの家で煙のない部屋で余生を二年間送って老衰で死んだ。孫の子守りを八人やらされて、「もうこんなに男の子ばかりの守はしたくないと言つた」母は「一人しか産めなかつたのに子守位は何でもないことや」と言つた。

二階の三部屋は改良普及員の次郎と新制中学生の五郎と六郎が占領した。それにしてもみんなよく頑張つてくれたもんだと思つた。親父の財布の底は見えているだらうなあと次郎が言つた。

「お前はいくら月給貰うんだ」と言つたが話にならんと云つただけである。

この次の問題である今のうちは何と言つてもサツマ諸を主体にした養豚を進めながら、茶の面積を増やしていくことだなあと云うことが、我が家の専属の改良普及員である様な弟の考えた結論であつた。

「今のうちに農協から農林省の農業の制度資金を借りて木を切つてしまつた里山に大きな豚小屋を建てて多頭飼

育をやれ」と弟は言った。

そして繁殖親豚十頭飼育の計画書を作って来て、鉄骨豚舎の借入金のを請書を農協に出した。

一週間するとこの集落の無立候補当選している農協の理事という人がやって来て、私の建てたばかりの家を眺め回して「これは大したことをやったなあ」「大へんな金があつたんだろなあ」と独り言を言っている。

この場に親父が居たならば大へんな喧嘩になったと思われる程の言い方であると思った。

然し豚舎の建築資金の融資を頼んである理事さんである。「金があつたんだろなあ」とは失礼な言い方であると思つたが、金が無ければ建つわけがないからつきつめて議論することも出来ない。

然し仲々に考えたことを言うもんだなあと思つた、若し「大へんな金がかつただろなあ」と言えばそれはもうこれ位かかつて方々に借金しているんだ。嘘だと思ふんならば聞いて来てくれと言つて、親戚の名はこれこれの家だから、と言えばもうそれでおしまいである。

まさか名を上げた家に行つて聞くわけにはゆかないだろうと思つた。

それならばわざわざ来てくれたのは豚舎の融資のこと

だろうか、と思つたがそうではなかった。

「実はもう、新築した家に火災共済を掛けることを奨めに来たんや」と言う。

なんだそんなことでわざわざ言い回しのようなことをしたのかと思つた。

「うん、それはもう焼けてしまつたらおしまいだから火災保険だけは掛けて置かなければと思つとる」と言つた。するとシメタと思つたのか急に言葉がはずんで来た、「それはもう新しく出来た積立て方式と言うのがあつてのう、毎年積立てて貯金をして行くようなもので三十年すると満期になつてその時は建て替え出来るようになる」

アハハハハ馬鹿なことを言うな、と思つたが仕方がなかった。

それでは年掛けと言うやつはないんかのう、例えば建築費の〇・二%位の安い掛金で一年保障で掛け捨てと言うやつは。

「それは農協はやつとらんのや」と言つた。それならば掛けてもよいと思つとると言つた。

「今奨めているという積立て方式というのは初年度の掛け金はどの位かのう」

「大体この家で三百万円位として二・五%とすると七万円位かのう」と言った。

「へえーそんな金弟の一年間の月謝じゃないか」

「あの二階で勉強しとる二人の月謝取りは向う六年間は間違いない保障をせならん」

「まだ出来たばかりの一人の月給取りはもらってすぐ使ってしまう位の月給取りである」

「アハハハ……お前は面白いことを言うなあ」

「何も面白いことはない真剣に表現しとるだけや」

それから一週間すると農協組合長から手紙が来た。先日の理事会に諮ったところまだこの組合は再建中であり何しろ前任者からの赤字金の累積が六百万円もあり制度資金の貸付迄は手が回りませんのでよろしく御願い申し上げます。と言うものであった。

赤字を解消する為には積極的に組合員に融資して手つとり早い畜産を奨励したらよいのと思った。それに倒産の為の危険防止ならば畑や田を抵当権を設定して置けばよいのと思った。

農業共済組合法による建物共済というのが国の制度として役場に事務局があるからと言うことでこれに加盟して掛金を払った。

一年の掛金は農協の積立金の共済法の十分の一であるから我が家の月謝取りさんの一ヶ月分ですむから大したことのない火災保険であると思った。

これは六十年後の今日も続いているのであった。

ここで親父の一大変心とでも言うべき事が起こったのである。お前も二十五歳になったのだから嫁を貰えと言いつ出した。

戦後生まれの七郎は六歳で八郎は四歳である。

「まだこんな小さな子供があるのに来てくれる人があるだろうか」と母は言った。

私は今から全力を上げて、藪北という茶の新品種を里山を開墾して五反は作る。それに今迄のサツマ諸畑を在来種を播いて二反は手つ取り早く成園にする。それに私達の曾祖父が播いてくれた古い在来種をしつかり肥培管理すれば今のところは専業農家としてこれに養豚を加えれば何とかなるだろう、と思った。それには最低五年はかかる。だから嫁を貰うのはそれからでよいと思つていた。

ついでに頭に浮かんで来たのは私達の曾祖父の播いてくれた茶園と言うのは一反三畝ある成園である、今に

なつてから曾孫の私がえらそうなことを言うのだけれども茶候園ソウロウというのは私の処の明治の始め頃播いた茶園だけであった。この候園というのは畑一面に茶が作つてあるという意味で他はみな畑のまわりにある周囲園と呼んでいるものであった。

何としても茶をふやそうと思った。

親父の方は言い出したらひっこめない性格である、どうしても早く嫁を貰えと言う。

三軒向こう隣の娘はどうだと言う。

同じ集落で顔は知っているのはお互い様であるが、その氣になつて話をしたことがないのであった。

それに学徒動員と高等商船の必死の勉強と訓練はそんなことを考える隙もなく帰つてからは納屋と家の建築のことで頭が一杯であった。それでも考えてみると今から五年の間にこれはいい娘だと思つて両方がOKと言うことで親に承諾を求めたとき頭からあんな娘は駄目だと言つたとすれば今迄の「豚は駄目だ」「二階建ては駄目だ」と言つて来たときのことを思い出すと、少し考えてみなければならぬことだと思つた。

この娘は四人姉妹の末っ子であった。

その氣になつて眺めて見ると何とも言えない可愛さは

ある。

それに父親は老齡でその弟と妹は多かつて苦労した上に親は博打で身上を潰してこれを立て直すのに苦労したんだ、と言う。

親父の方から言い出したことだ今迄と反対に私の方から反対して見るのもよいだろうと思つた。

いろいろ考えをめぐらせて見るとうちの親父はこの世に俺の上に出る考えのある奴は居る筈はない。と思つてゐるのではないか、という処に到達するのである。こんな人格を持った者は世界中探してもあまり居ないだろう。

田舎のあまり生徒数のない小学校で一番で通し現役徴兵の兵隊生活では軍人勅諭を一番先に暗誦出来て除隊するときには成績抜群優秀という講評もらつて伍長勤務上等兵で代表で除隊のとき賞状を貰いに行つた。

そして「井の中の蛙大海を知らず」と言う処であると言つるのは私の評定である。然しこの娘の父親だけは一目置いていた。

結婚の結論としては、相手の娘はどんな娘かもう少し確かめて見たいという私の意を無視して仲人を頼んで来て話をきめた。

何とお前は優柔不断な奴ではないかと言はれるわけがあるが、その頃私はちよつとした哲学のブームであつた「人生創造哲学」というのに入つていた。

千葉県の木更津に本部のある、石丸悟平氏の主宰する「人生は創造である」という原理によつてすべてを解決出来るというものであつた。これは氏自身の経験による虚弱體質からの脱出方法というのは、全く私自身の子供のときからの経験に合致していたからであつて、この哲学には大変教えられる處があつた。

人生は自ら創造して行くものだ、即ち作り変えて行くものだ、それをするのが仏教は悟りを開くと言う。

大略こういうことではなかつたかと今では思つてゐるのであるが。

結局この教えによつてこの結婚をきめた。それによつて六十年後の今日はどうか。

これは後日のこととして、結婚生活は九人家族で寝食の方の寝の方は離れ屋の新婚者であるが、食の方は新築の母屋で共にする生活が始まつた。

それに親父の考えが変わつたのかどうか麦稈葺屋根の旧母屋の廃材で二間梁で四間のトタン屋根の小屋を建てた。これは精米機と小型の製粉機を買つて依託の米搗き

と小麦の製粉をやろうと言ひ出した。

私は弟と話し合つた。これは母屋の建築費に豚が役に立つたのを認識したためだろうか。

弟はそうに違ひない。「あまり頭数は飼はなくてもよい、この際に優良系統の豚を導入しよう」と言つて県の種畜場の方に雌雄一頭づつの仔豚を払下げの申請を出した。

機械代の方は奥山の五十年生の杉松の材木を売つた跡に植林した幼木林をしつかり下草刈りをやつて手入れしたのが見事な程になつた、何しろ日本中の住宅が焼けたのであるから山林の価値は大へんなものであつた。これを土地のまま売つてしまおうと言うことであつた。

今迄山の手入れはみんな祖父まかせであり里山続きの他の一町歩の松茸山の手入れもみな祖父まかせであつてこの奥山の用材林の立木を売つた跡の植林と下草刈を私は始めて味わつたわけであるが、この山は地味もよく買手は多かつた。

これを売つて製粉機を買つた。これは足の悪い親父にとつてうつつつけの仕事であつた。

さて種雄豚を飼うには少し離れた處でなければならぬ。家の下の竹藪を持ち主の家の近くにあつた里山と交

換してもらって豚舎を建てた。これは農協からの融資が望めないで自我流の釘打ち大工である。幸い祖父の大工道具はみんな残っていた。

里山の建築用材を伐ってしまった跡に残った稲架位の小径木を伐って来て釘打ちで三十坪の豚小屋を建てて助手の嫁さんとコンクリートを手こねでやって出来上った。

その頃有名な養豚学の永田幸平先生の本を買って来て勉強した。

何と言っても豚は汗をかかないので夏の暑さに弱いということでもトタン板一枚では駄目だと言うことになりタル木を止めた間にコウマイと言う薄い貫き板を作って来て張った。この上に藁をしっかり敷き詰めてその上に貫板を張ってトタン板を張った。これは成功であった。

かなりの暑さをしのげるようになった。

それに村中が養豚熱が上って来て、豚を飼う人が多くなって来て豚の種付けに来る人も増えて来た。

親父の方の委託精米によって出来る米糠と製粉によるフスマを最大に利用して親豚十頭を飼育して年二回の出産により百六十頭の仔豚を生産して農協の仔豚市場に出荷出来るようになった。

農協の方も組合員への融資はためらっていても、出来上った生産物の方は出荷の市場と運搬手段のトラックを用意して受け入れてくれた。その上養豚部会と言うのを作ってこれに勧誘に来た、こうしてしばらくの間安定した安心の収入を得ることになった。

其頃ナショナル電気の松下幸之助社長が借金王としてマスコミの話題に上らない日はない位であった。

その借金王という表現の裏にはそのうちに破産して倒産だというニュアンスを含んでいるような言いかたであると私は思った。

その時から私は決してマスコミの発する流言飛語は信ずるべからずと心に決めた。

日本中の農協が貯金せよ、貯金をせい、と絶叫しながらこれを組合員に規模拡大のための融資をためらっている。

これは組合員の方の百姓も昔からの借金即破産という感情によつての融資即破産というものであった。そしてこの貯金せよの大合唱によつて吸い上げた金は、ナショナル電気やトヨタ自動車に行つたわけであり、しばらくすると借金王の松下幸之助は経営の神様となり石田退三は豊田自動織機という安定した地位から自動車という未

來のわからなかった地位に引き抜かれて成り振りかまわぬ規模拡大をやつて名を上げた。

それにしても我が家の米搗きと製粉という仕事は大変に親父の氣に入つてよかつたけれども、米や小麦を持つて来てくれる村中のお客さんに対しての大言壯語が氣になつてしようがなかつた。

豚を飼おうと言つた時猛反対したのに今になつては豚様のような話をしてゐる。

弟の次郎の方は農家の次男であるという看板を背負つて農業改良普及員として農家を回つてゐるのだから忽ちのうちに婿養子の要望が來た。

然し初めての婿養子に出す弟である、婿入り用支度金があるわけがない。

ここで親父が一計を案じたのかどうか知らないが、我々新婚の愛の巢である離れの座敷を見に来る人がある、或時嫁さんが言つた。

何だそれは、と思つてゐるうちに親父が宣言した。

「あの昔からの大分古くなった離れを買つて言う人が出來たから賣ることにする」

「お前達は母屋の方に移れ、次郎が行つてしまえば部屋

があくから」と言つた。

こうしていくらで賣つたのか知らないが昔流の婿入りの仕入れが出來たわけであるが。

次郎が行つてしまつたとすぐに親夫婦は二階に上がつてしまつて、「お前達下の方が便利だぞ」と言つた。

これは俺が反対した二階造りであるから仕方なく使つてやるぞ、という意味にとれる。

今迄のいきさつは何も話してないから、次郎が行つてしまつた跡の二階に住めると思つていた嫁さんは大変不機嫌であつた。

「うちの二階の階段は少し急傾斜だから、お前が妊娠中に階段から転んで怪我でもしたらあかんから、下の方がええぞ」と言つてみてもなかなか不機嫌が直らない、女つてこんなものかなあ、男の兄弟ばかりの私は初めての経験にとまどつた。

それにしても初めての弟の婿入り先も親父さんが戦死して男手のない家であつた。

このまま改良普及員を續けてほしいと言つたわけであつて田も畑もかなりな面積があつたので、農繁期には手伝いに行つてやれと言ふことになつて、親父も母も進んで手伝いに行つた。

父の方は米搗きと製粉があるからあまり行けないが母は手伝いに行つて驚いた。

全く家の百姓のやり方とは違つていたからであつた。

百姓のやり方と言うよりも一家の主人が居なくなつてしまつたんだから何処かで手抜きをやらなければやつて行けないわけである。

家の方のやり方は私に言はせればこまねずみ農法であると思う、母はよく言つてゐる。

「上農は草を見ずして草を取る」と言うものであつた。農地には草を生えさせないようにすること、或いは目に入る程の小さな草のうちに取つてしまうこと。これが為に自己労力だけで経営出来る面積は少なくなる、その上こまねずみのように一日中あちらこちらの畑をかけ回らなければならぬ。

自分の処は専業農家として規模拡大は茶の幼木の育成であり三百六十五日毎日一定の時間は費やさなければならぬ養豚がくつついてゐる。

その点田の方はまだ要領よくやつてごまかすことも出来る。

今迄慣耕栽培というものに馴れて来た母にはもう目に余る程のやり方であつた。

それでもあれでは女子等がかわいそうだから出来るだけ手伝いに行つてやれ、と言う。

私は弟に言つた。何と言つても田拵えが一番の農繁期の労働力だから、これを機械力でやれないか、まだ耕運機は高くても手が出ないがアメリカのメリーテラーの改良型で水田の代掻用が出来たらしいが、それでもかなりな値段がするの、か、と言うとまだ新品では手が出ないが米処の大規模の農家で、しょつちゅう新しい農機を買い替へている家があるからあれの下取りの古を買つて来たかどうか、と言う、それはいいなあいい処の古を見つけて来てくれ、と言つた。

何しろ改良普及事務所では一番下積みの新米の部類で緑の自転車から二輪のオートバイに代わつてみんなのオートバイの故障直しの受け持ちなんだ、と言う。

何しろ二サイクルのオートバイなら古でも故障は少ないからテラーなんか一年のうち十日も使わないうやかなあ、大丈夫さ。と言う。

こういうことで来年になると田植の時季の一ヶ月前に今迄聞いたことのない農機具屋が新品と見違へるようなテラーを積んでやつて来た。

もう田の方は沼田の方は人力の鋤で起こして固沼と言

う春先には牛で起すことの出来る田は鋤で起こしてあった。

この固沼というのは田床はあまり深くなくて牛で代掻きの出来る田である。この田は用水の溝もあって灌水も出来るのでちよつと早いがこの田に水を入れて試運転をやることになった、トラックから降ろしてゴム車輪を外してカゴ車輪というのを両側につける、後ろにこの車輪兼耕作輪の進行を安定制御するレキがついているだけであり丈夫なハンドルにチョークとクラッチとアクセルのついたものであった。

このカゴ車輪というのはどこかで見たものだと思った、進行方向に向かって外側が後退するように桁がついている。あ、これは岡山の高等商船の入学式に行く時、間違つて宇野港に行つてしまったとき宇高連絡船についていた外輪と同じものだと思った、水が中の方に飛んで来ないように外側に向かって斜についているのだと思った。

試運転の結果は上々であつた。この小さな馬力でまたたく間に碎土して代掻きしてしまうのである。

私は弟に言つた、これで新品の何%位ね。まあ新品は新型で違つているからわからんが大体半値位だろうと言

う。

それはまあまかしとくとして買うことにきめた。

親父は弟の婿入り支度がすんでからすぐに、これからはお前が一家の財布をやれと言つて空財布を投げてよこした。

空財布どころか空手形の入つた財布であるではないかと思つた。

然しこの婿入先の家は三人姉妹の長女の婿に行つたわけであるが、この末子は父親が戦死したときにまだ母の腹にいたということであつた。

これは大変な処に縁があつたのだと思つた。この中古品のテラーが調子よく働いてくれるのに氣をよくしてオートバイ店からすゝめられて一二五ccのスズキのコレダ号の中古品を買つた。

高等商船の教官のエンジンの解説の時間を思い浮かべて見た。

四サイクルガソリンエンジンが普及した時、ドイツのオットーという技術者が二サイクルエンジンを發明してみんなに公表した。

何しろ一回転に一回燃料を爆発させるんだと言うから皆んな信用しなかつた。そんな馬鹿なマジックのような

こと出来るわけないじゃないかと言って半信半疑で見に来てびっくりした。

このようにして動くのだという図解がしてある。それにクランク室が密閉してあるので潤滑油を入れて置くわけにゆかないので困っているからガソリンに混合して使うんだと言う。これは動いているから間違いないことなんだけれどもどうしてもみんなが納得がゆかないから分解して見るようになった。

四サイクルと違うのは爆発を受けたピストンが下死点に到達する手前でクランク室から上って来たガステ燃料をシリンダーの横にある吸入口を通過すると同時に反対側にある排気口が開くようにしてあるので燃料の吸入と排気を同時に行うという全くのマジックエンジンであった。

ディーゼルエンジンは焼玉エンジンから進化したと言はれる、それ故焼玉エンジンのことをセミディーゼルと言う。

この進化のプロセスとは違った何かがあって進化したのかわからないが、とに角エンジンの古くなって駄目になる急所はシリンダーの磨耗と吸入弁と排気弁の磨耗である、と思ったのである。

昭和の初めから東北大学の金属学研究所の所長を勤めて来られて後、総長になられた我が国が世界に誇る金属学の神様本田光太郎博士の永久磁石のKS鋼の応用等があつて、すべての農機に応用されて来たんだからと思つた。

何しろ戦時中の高等商船の教官の解説に、戦艦大和の舷側は五種の厚さであり鋼鉄の神様本田光太郎博士の耐衝撃鋼が使われていて、少少の魚雷攻撃では沈まないんだ、と言つた。

この様な戦争の道具がこんどは平和的な農機具にも応用されて来たであらうと思うと、ちよつとの中古品では使えなくてはならないだろうと思つての考え方である。明治維新から大正までの間の考えは違つていた、何しろ舶来品崇拜思想は強固なものであつた。それで舶来品は高いが国産品は安い。昔から安物買いの銭失いと言うのが親父の考えであつた。

それでも先づテラーで味を占めた私はオートバイに手をつけ次にはまだそのときは二サイクルエンジンを搭載していた軽トラックの中古品を買つた。

親父は何と言つても古を買うのは安物買いの銭失いという考えだろう。

「俺ン処の息子は古が好きで、う、まあ見てくれ、テラーは古を買った。オートバイも古や軽トラも古や」といつて米搗きを依頼にくるお客に対して披露の毎日であつた。

何故ここ迄言はなければならぬのかわからなかつた。

古でも何でもよい。故障でエンジンが止まったとしても、空から墜ちる航空機や漂流する船舶ではない。それに今度は新品に替えようと思つていても月謝取りを卒業して月給取りに行く為の弟の支度金がこれを取って行くのである。そしてこの馬鹿親父がと世間にわめいてみてもその反響は自分に返つて来る。

製茶組合の忘年会でみんな共同で買つて使つていた茶園の深耕機が古くなつていらなくなつて処分することになった。誰も引取手がない。すると組合長が一パイ入つてゐる顔で冗談半分に言つた「お前は古いものが好きだと言うではないか、どうだ引き取つてくれんか」と言つた。

「俺が古いものが好きだと誰が言つた」

今迄に出したことのない大声を張り上げて言つた。

するとみんな呆氣に取られてシーンと静まり返つた。

こんなに静まり返つてしまふとは思わなかつた、

「俺は古いものは嫌いだ、仕方なしに買つて使つてゐるだけだ、そのわけは誰も知らん」

立ち上がると組合長の方に詰め寄つていく振りをして二三歩あるいた、すると親友のNがつかつかと寄つて来て俺の手をつかんで外に連れて行こうとした。

俺は一瞬の隙にその手をつき放すと彼はもんどり打つて尻餅をついた。

俺は酔つてゐる振りをして再度大声を上げた。

「おいみんなよく聞いてくれ、この世の中に古いものなんか好きな奴は誰も居らん」

「只後家の後を追っかけ回してゐる奴だけだ」

これは言い過ぎてしまつたと思つたが仕方がない。

みんな一緒に笑いでまぎらはせてくれた。

北一輝の日本改造法案大綱に「兄弟の愛なんでものは父母の愛の十分の一だ」と書いてある。

父母の愛というものは盲愛であり自己中心的である。

何とかして第四人に世間並の教育、その頃はもう新制高校に行くのが普通であつた。これはもう家を中心にして財布を渡してしまつた息子は、自分そのものでありどん

な事を言ったって、どんな無理な注文つけたって黙って聞くもんだと言う認識以前のものであり、本能に従っているだけであると言はなければならない。

「生きているものは皆無限の対立を含んでいる、即ち無限の変化を生ずる能力を持っているものである」。という西田哲学の本領を解説すれば、父にとって息子とは自分の作ったものであるから自分そのものである、ということになるのだろうか。

それでも西田哲学ではそれ自体が対立を含んでいるんだと言う。

それに身体健全な親と子であるならばこの哲学も通用するだろうが、父は膝の曲らない不自由な体の代替品としてこれを息子に求めているのではないかと思うと恐ろしい未来を感じるのであった。

「お前達月給上がったか、そうかやつぱり月給取りやないとかあかにや」

これは正月の休みに弟達みんなやって来て祝いの酒をくんでいるときの話である。

これは私達が小さいときからの父の持論であるから仕方のないことであるだろうか。

然しその後何日かして、「お前が百姓をやるといった

からいけなかったんやぞ」と言うのが真顔で私に言うのがきまり文句であった。

その頃はまだ集落の自家用車も多くはなく、県道に出て隣の集落に行かなければならない床屋に自転車に乗って行くのはもう何も手伝うことが無くなつた時である。その頃はもう豚をやめて製粉精米もやめてしまった。

只製茶の時に精揉機の受持ちだけが残っている仕事であった。

或時床屋から帰って来た父が何か不機嫌な様子である。

「どうしたんね」と言う父がしゃべった。

Sがお前んとこの息子はお前より偉いと言ったという。Sとは前の村長のことであった。

退職してから初めて床屋でばったり会って昔のことや其の後のことに話がはずんだ床屋談議のことであった。

「わりや（お前）どんなことを言ったんね」

「お前とこの息子はお前より上やと言った」

「へッ、何を知ってそんなこと言ったんね」

父は家を建ててから後の二期八年間村会議員に推されて、このSといっしょに村議を務めて気が合つてその後村長に上るための有力な支持者としてやって来た仲で

あつた。

それでも息子の方がお前より上や、と言はれたことに
こんなに腹が立ったのだろうか、と私は思った。

「わりやどんなこと言つたんね」と言はれたつて私には
何も思ひ出せないのであつた。

「へッ!!何を知つとつてこんなことぬかしやがつたんね」
これはSに対する父の抗議であつた。それを私に八ツ当
たりしているのである。これは父が私に対する正氣の最
後の言葉であつた。

其後間もなく徘徊老人となつて、過去と未来を超越し
た、只現在の実在であるのみという生き者となり足の悪い
体で二年間集落の隅々迄昼夜の別なく思いつくままに母
の手を借りて歩き回つた。

其後更に一年半寝たきり老人となり恍惚の国に遊んで
亡くなつた。

私はこの自己中心主義を貫き、ナルシシストに陥つた
父をもて余し恭い敬することはどうしても出来なかつた
不肖の息子であつた。

然し五人の弟達は皆私のこの不行届きを知らぬふりを
して認めてくれている。

誠に有難いことであつたと思う。

